

# 神並遺跡西端部の水路跡と埋積谷

下水 1-10 工区管渠築造工事に伴う神並遺跡第 8 次発掘調査報告



## 目次

---

1.はじめに	1
2.調査経過	2
3.調査結果	3
3.1　遺構・遺物	3
3.2　人工遺物	9
5.まとめ	26

---

## 例言

本書は、財団法人 東大阪市文化財協会が東大阪市下水道部の委託を受け、昭和61年6月7日から7月26日までの期間に、実施した神並遺跡第8次発掘調査の報告である。現地の調査は同協会の松田順一郎が担当し、岡田義明、小林辰生、中道真司が調査補助員として従事した。また、現地の掘削工事は、株式会社 大成建設および安西工業が行った。本報告書の執筆・編集は松田による。遺物の写真撮影はGFプロにより、一部は松田による。

遺物実測図は通常のトレース図とは趣を異にするが、これはデジタルカメラで撮影した画像を、ドローリングソフトウェアのCANVAS™上にプロポーションを調整しながらトレースし、インクジェットプリンタで出力したものである。遺物実測図のCAD化はトレース作業の省力化と画像のデータベース化にきわめて有利だと考えられる。これに向けての一つの試みと考えていただきたい。

I: 器実測図で用いた表現の凡例は15ページに示した。胎上に含まれる砂粒は、鉱物と粒径を以下のように記載した。F=長石、Q=石英、M=雲母(金雲母を含む)、B=黒雲母、A=角閃石、Ch=チャート、Mm=上記以外の有色鉱物。これらを多く含まれる順に列挙した。粒径はGr=細礫、VCS=極粗粒砂、CS=粗粒砂、MS=中粒砂、FS=細粒砂、VFS=極細粒砂をWentworthの区分に従って記載した。土器の色調はマンセル記法を用いた。4ページの堆積断面図でも、粒径と色調を同じ方法で記載した。

## 報告書抄録

---

ふりがな	こうなみ
書名	神並遺跡西端部の歴史時代水路跡と繩文-奈良時代の埋積谷
副書名	下水1-10工区管渠築造工事に伴う神並遺跡第8次発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	松田順一郎
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
所在地	〒577 東大阪市荒川3丁目 28-21
発行年月日	平成9年3月31日
所収遺跡名	神並遺跡(こうなみいせき)
所在地	東大阪市西石切町1丁目(ひがしおおさかしにしいしきりちょう)
コード	市町村27227
北緯	34° 40' 36"
東経	135° 38' 45"
調査期間	1986年6月7日~7月26日
調査面積	113.6m <sup>2</sup>
調査原因	下水管渠築造工事
種別	
時期	弥生時代~室町時代
遺構	水路・土壤・井戸・埋積谷
遺物	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦・陶磁器・錢貨
特記事項	

---

表紙カットは、Bトレンチの地表下約3.5mで検出された埋没林の株。  
今後年代測定、樹種同定が待望される。

## 神並遺跡西端部の水路跡と埋積谷

下水 1-10 工区管渠築造工事に伴う神並遺跡第 8 次発掘調査報告

1. はじめに

神並遺跡は東大阪市の東部、東石切町1・2丁目西石切町1丁目にかけて所在する古河遺跡で、生駒山地の西山地斜面から発達した扇状地緩斜面の標高17~50mにひろがる(図1)。この扇状地斜面の表層地質は、更新統最上部から先新統に相当する掃流性および土石流性の堆積物からなり、約1万5千年前の後期石器時代のナイフ形石器(背つき尖頭削器)(東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会、1987)・約1万~8千年前の縄文時代草創期頃の両面調整尖頭器(中西・木越、1996)などがわずかに出土している。また、遺跡東部の標高約45m付近の現地表下数10cmでは、縄文時代早期の焼土壙や同時期の押型文土器が検出されている(菅原、1992)。その後の縄文時代の考古資料はひじょうにとぼしい。縄文時代晩期以前に開析され、縄文時代晚期末から奈良時代までの堆積層で充填された、幅10数m、深さ3mあまりの埋積谷が、同遺跡西辺の西ノ辻遺跡と境を接する地点で検出されており、その中・上部では弥生時代後期の土器資料、古墳時代中期末~後期の水利遺構の一部や、人物埴輪を含む土器資料が検出された(東大阪市文化財協会、1984)。古墳時代の住居跡などを含む遺構・遺物は6世紀頃のものを中心に、數か所で検出されている(たとえば中西・木建、1996など)。また、遺跡範囲の東部は、同時期の神並古墳群の分布域と重複している。奈良~平安時代、鎌倉時代頃の遺構は、掘立柱建物跡群が遺跡範囲の東部と北部で検出されている(下村ほか、1986)。これらの歴史時代の遺構・遺物は、遺跡の北に所在した法通寺とその領地や、文献史料にみられる「神並庄」との関連が指摘されている(下村、1985)。

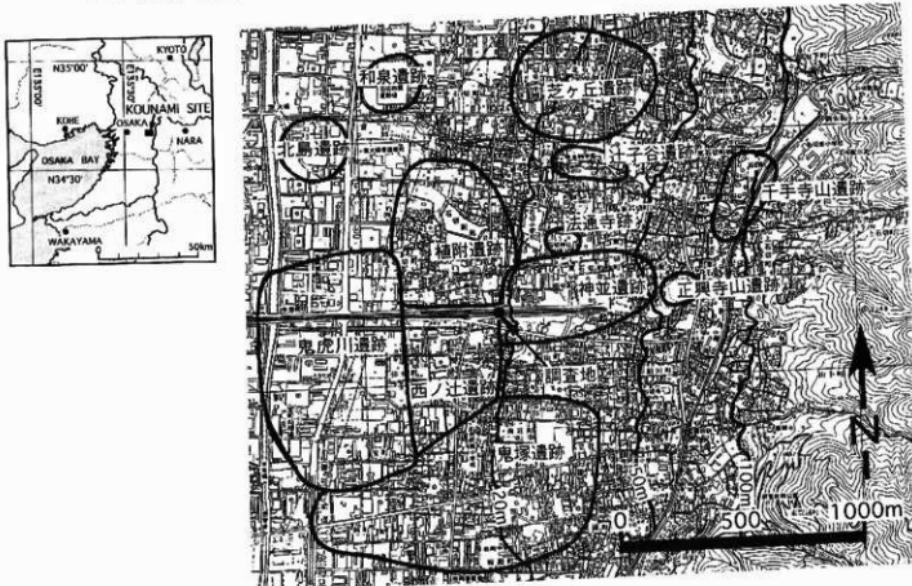
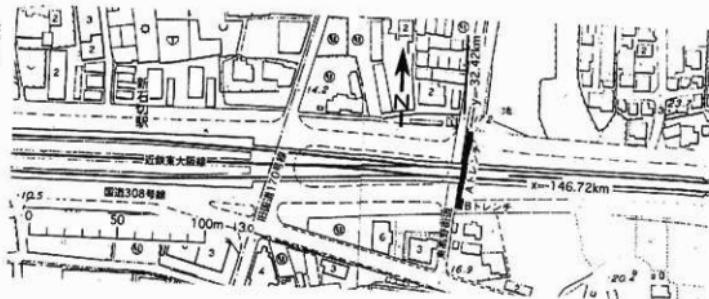


図1 神並遺跡と調査地の位置

図2 神並遺跡

第8次発掘調査  
トレンチ配置図

神並遺跡第8次発掘調査は、上述した西ノ辻遺跡との境界となっている旧東高野街道の道路敷東側を南北に走る下水管渠の地下埋設および推進工法の堅坑掘削工事(下水I-10工区)にともなって行われた。現地の発掘調査は昭和61年6月16日から7月26日までの期間に行われ、その後考古資料の整理作業を行った。以下にその概要を報告する。

## 2. 調査経過

現地の発掘調査は、西石切町1丁目5番地隣接地で、旧東高野街道の舗装道路東側に沿って南北に走る水路を暗渠化する、管渠構造工事にともなって行われた(図2)。この区间でおもな調査対象となったのは、近鉄東大阪線高架下をくぐるかたちで、水路部分に設けられた幅2.5m、長さ38mの細長い領域(Aトレンチ)であった(図3)。その南に隣接して設けられた推進工用の堅坑部分、5×3mの領域(Bトレンチ)も調査対象となった(図4)。両トレンチともに鋼矢板の土止めが施された。

調査期間は、梅雨にあたり、調査・工事期間の付け替え水路の容量が小さかったこともあり、まとまった降雨時には、水路上流からの雨水・汚水が調査トレンチ内にいっせいに流入し、短時間で調査区域が完全に水没するという事態がしばしば生じた。そのため、記録を済ませていない堆積層断面が崩壊したり、上層遺物が下層に混じり込むという不都合が生じた。後に示す堆積層断面図が欠けているのは、このような事情による。また、発掘調査に先行して、工事の一部が行われたため、現地表面から、後述する検出構造面までの堆積層はほとんど失われていたほか、Aトレンチ内の北端と南端の比較的広い領域の堆積層が搅乱されていた。

今回の調査区の東側に隣接して昭和58年度に実施された神並第4次発掘調査区が、道路を隔て西側に近接して昭和59~60年度に実施された西ノ辻第10次発掘調査区がある。これらの調査では、すでに述べたように縄文時代晚期以前に開析され、おもに弥生時代から奈良時代までに埋没した東西方向の埋積谷が延長約150mにわたって検出されている。埋

図3 神並8次Aトレンチの機械掘削



図4 神並8次Bトレンチの調査風景



積谷内の弥生時代の堆積層からは、神並遺跡側ではおもに後期初頭の土器が、西ノ辻遺跡側ではおもに中期後半の遺物が出土している。また、遺物が頻出する堆積層より上方の層準には、最近の道路部分の調査で、弥生時代後期のものと判明した貯木の跡が検出されている。その上位の古墳時代の層準では、両遺跡の調査区をとおして、5世紀末から6世紀初頭の遺物を石組の貯水池を掘音でつないだ水利遺構が検出されている。埋積谷最上部の奈良時代層帶では、神並遺跡側で貯水池や水路の跡を、西ノ辻遺跡側では水路にともなう護岸施設や、水路に直交する杭列が検出されている。また西ノ辻遺跡側のさらに上位の層準では室町時代の集落跡を構成するような井戸や掘立柱の遺構群が検出されている。今回の調査区では、これらの遺構・遺物を含む堆積層を追認するかたちで進められた。なお、調査の掘削深度は、管渠工事の最大掘削深までの、地表下約5mまでであったため、上述した埋積谷内の弥生時代中期堆積層より下位の層は調査されていない。

Bトレンチでは、いわゆる「地山」とよばれる更新統最上部の地層を現地表下約5mまで試験的に掘削し、遺構・遺物の有無を探った。観察された堆積層の累重は、数cmから數10cmまでの砂・シルト・シルト質粘土層の互層で、しばしば植物遺体や腐植の葉層が挟まれていた。ほとんど遺物を産出しなかったが、地表下約3.5mで、木炭片が散乱し、樹木の株が原位置を保って散在する層準がみとめられた。更新世末、最終氷期の埋没林と考えられる(図5～7)。また、同層準では加工木らしき木片が2・3点出土した。その後の調査地との層序対比や材化石の年代測定などの作業を残しているため、本報告ではBトレンチの調査結果については述べない。

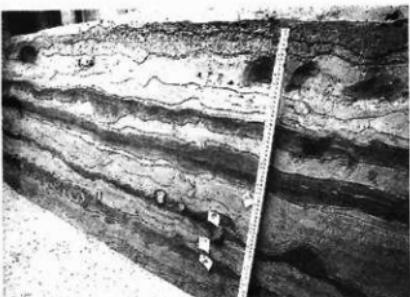


図5 Bトレンチの堆積層断面写真  
掘削深は現地表下約4m付近で、更新統最上部の堆積層と考えられる。

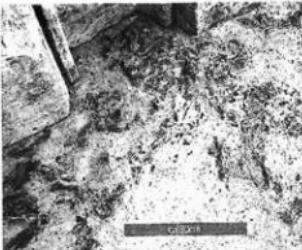


図6 Bトレンチで検出された炭の散布状況



図7 Bトレンチで検出された株。最終氷期頃の埋没林と思われる。

### 3. 調査結果

調査地で観察された上層の断面図を図8に示し、単層の岩質・色調を掲げる。岩質による堆積相の区分(単層区分)による観察から知られる顕著な堆積相の変化、遺構・遺物の検出層準とそれらの相対年代などにもとづき設定した層序学的区分をここでは遺構・遺物帯(ethnozone)と呼び、上位よりI～VIIIを認定した。図で、遺構・遺物帯IIがIVの下位に示されているのは、本帯に相当する水路の堆積層を断面手前側に残し同一面に投影したためである。以下に、上位の遺構・遺物帯から順にその概略を記載する。

#### 3.1 遺構・遺物帯

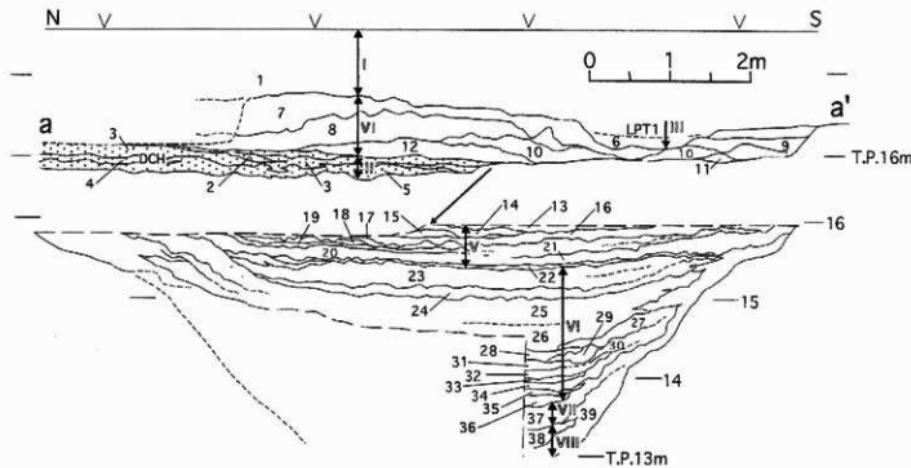
##### 3.1.1 遺構・遺物帯I(単層1)

調査地東半は、旧東高野街道の道路面とその東側で一段高い耕作地の境界に位置するため、現地表面直下には高い側の耕作地造成に際して形成された盛土層および耕作土層の再

堆積層が分布する。これらはおおむね塊状の砂礫まじり粘土質シルトからなる。本帶からは近世・近代の磁器と、中世以前の須恵器・土器が出土した(図20)。

### 3.1.2 遺構・遺物帶II~III(単層2~5・土壤内堆積層は6)

これらの遺構・遺物帶で検出された遺構を図9に示す。遺構・遺物帶IIは、調査区北部を北北東-南南西方向にのびる水路跡(図9のDCH、図10~13)の堆積層で構成される。上部(Ⅱ層2・3)は、流水性のシルトまじり砂礫、下部(4・5)は砂礫質シルトをマトリクスとし、小型~大型の大礫(small ~large cobbles、直徑64~256mm)・瓦片・上器片からなる堆積層から構成される。礫は角閃石斑岩と花崗岩の亜角~亜円礫であった。水路幅はその西岸部が調査区内にはいらなかったため不明だが、道路を挟んで西側の西ノ辻遺跡第10次調査区では、この水路は検出されていないので、道路幅よりは狭く2~3mではないかと想像される。深さは、調査区東辺の検出面との比高が約70cmあるが、西辺での比高が不明なため、明確ではない。水路内の堆積層の厚みは、40cm弱で、想像される水路幅に対して相対的に浅い。水路底の礫は計測を忘ったが、水路底に堆積した礫の最大



1. 捩乱土・盛土
2. シルトまじり砂礫 2.5Y4.5/1
3. シルトまじり砂礫 10Y4.5/1
4. 砂礫 10Y4.5/1
5. 砂礫 2.5Y5/2
6. 砂まじり粘土 10GY3.5/1
7. 砂礫まじりシルト質粘土 10YR4/3.5
8. 砂礫まじりシルト質粘土 5G3.5/1
9. 砂まじり粘土 10YR4/2
10. 砂礫まじりシルト質粘土(灰黄色質粘土質シルトブロックを含む) 10YR4/1
11. 泥まじり中礫~細礫 10YR3/2
12. 砂礫まじりシルト質粘土 7.5Y4/1
- 13, 14, 16. 砂礫まじり粘土 2.5Y3/1
- 15, 17, 21. 砂礫まじり粘土 2.5Y3/1(埋積谷ベースの5GY4.5/1粘土質シルトのブロック土まじる)
- 19, 22. 横粒砂とシルト質粘土の葉層互層 5GY3.5/1

23. 細礫まじりシルト質砂 5Y3.5/1(炭・植物遺体多い)
24. 砂まじりシルト質粘土 10YR3.5/2(植物遺体多い)
25. 粒粒砂まじりシルト質粘土 5Y4/1
26. 粗粒砂~中粒砂まじりシルト質粘土 5Y4/1(最下部は泥マトリクスの砂礫)
27. シルト質細粒砂 5Y4/1
28. シルト質粘土 5Y3.5/1
29. 中粒砂~極細粒砂 2.5GY4/1
30. 粘土質極細粒砂 5Y3.5/1
- 31, 33. 細粒砂~極細粒砂葉層の互層 2.5GY4/1
32. シルト質粘土 5Y3.5/1 A<~34. 砂まじり植物遺体層 2.5Y3.5/1
- 35, 36. シルト質粘土・細粒砂~極細粒砂葉層の互層 5Y4/1
37. 砂礫まじりシルト質粘土+伐採木 2.5Y4/1
38. 砂礫まじりシルト質粘土 2.5Y3.5/1
39. 砂礫質粘土質シルトのブロック土 7.5GY4~5/1

図8 Aトレーナー中央部の堆積層断面図。I~VIIIは遺構・遺物帶の範囲を示す。断面位置a-a'は図9に示す。

長軸方向には、流路に直交するものと、並行するものの2つのモードがあり、投棄された状態から、強い流水によっていくぶんリワーカしたものと考えられる。ただし、インプリケーションがほとんどみとめられないため、これらの礫の上面を越える水深での強い流水に長期間さらされてはおらず、また長距離の運搬・堆積はなかったと判断される（図12・13）。このようなことから、水路底の堆積物は隣接地の水路側方から投棄されたものと思われる。

本帶から出土した遺物の相対年代は、15世紀後半から16世紀を示す（表1・図19、図21～27）。ただし、瓦は土器類より古い相対年代を示す。が、遺構・遺物帶Iの一部を切るかたちで形成された護岸の杭列が水路東辺で検出された。さらに、東辺水路東岸側の一箇高い場所で、遺構・遺物帶IVの飛鳥一奈良時代の堆積層をベースにした遺構・遺物帶IIIの上層が2基検出され、そのうち上層I（図9のLPT1、図11の右方、断面の上面に残存）は、直接的には現代の水路に切られているものの、予想される元の平面形からみて、すでに本帶の水路形成時にその西端部を削られていたと考えられる。また、井戸（図9のWEL、図14）は、水路底の礫・遺物層に上部を削平された状態で検出され、水路にともなう杭列がこれを横断していた。これらの土壌からは、水路底に堆積した遺物とほぼ同じ相対年代を示す遺物がわずかながら出土している。したがって、水路の上限年代は、人工遺物のみから判断される年代よりは新しく、15～16世紀の遺構・遺物が廃棄され、わずかながらも



図10 中・近世の水路跡検出状況。調査区北端から南を撮影。トレンチの側壁は、先行した工事掘削のため失われている。水路内の堆積物には礫と瓦がめだつ。



図11 中・近世水路跡の完掘状況。Aトレンチ中央部から北方を撮影。

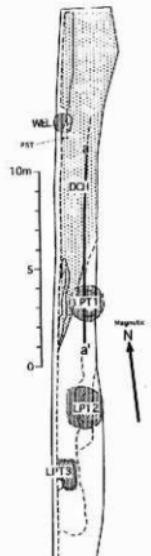


図9 Aトレンチ北半、遺構・遺物帶II～IIIの遺構分布図。WEL=井戸、PST=土坑、DCH=水路（溝）、LPT=土堤。

図12 水路内の堆積物（古流向は左下→右上）



図12 水路内の堆積物（古流向は左下→右上）



図13 水路内の堆積物（古流向は左上→右下）



図14 Aトレンチ北部の水路底に残存する井戸遺構(WEL1)。撮影方向は西。



図15 Aトレンチ中央部、水路底に残存する土坑(LPT3)。撮影方向は西。

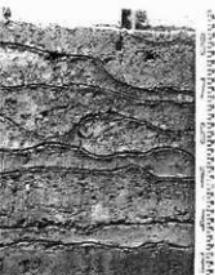


図16 遺構・遺物帶IVを構成する堆積層。

埋没後、耕作地造成による整地などの土地変更とともに形成され、少なくとも近世のある時期まで同一の流路 (N16°E) を保っていたと考えられる。現代の水路はこれとは斜交し、ほぼ南北方向 (N2°E) にはしる。

遺構・遺物帶IIIに含まれる土壙2(図9のLPT2)・土壙3(図10のLPT3、図15)はその上部を現代の水路形成時に削平を受け、浅く残存したものと考えられる。15~16世紀の遺物とともに、先の水路底の礫と同様な礫が散布していた。

### 3.1.3 遺構・遺物帶IV(単層7~12)

本帶を構成する堆積層は、調査区東辺にのみ分布した。塊状ないし不明瞭な葉理をなす砂礫質シルト質粘土で、堆積物密度流(おそらく上石流にちかい泥流)の堆積物と考えられる(図16)。また、層理の間には、掲流性の堆積層と考えられる薄い砂礫層が挟まれていた。調査区の北部では、遺構・遺物帶IIの水路によって、また南部では現代の水路と調査に先行した工事の掘削によって失われていた。出土遺物は奈良~平安時代のものと思われる須恵器が1点(図28-55)と、下位層準より混入した土師器破片(図28-56~64)などがわずかに出土した。本帶の相対年代は、これらの遺物と、本調査の東に隣接する神並遺跡第4次調査区との層序対比によって決定した。

### 3.1.4 遺構・遺物帶V(単層13~22)

本帶はおもに埋積谷谷壁を構成するベースの堆積物の礫層と砂質シルト質粘土とを混合した人為的な埋土層、およびこの層中に挟まれる2~3枚の流水性の砂礫帶層からなる。人為的な堆積物からなるが、埋積谷内の堆積サクセッションの最上部の層準である(図17)。本帶からは、5世紀末~6世紀初頭の土師器(窯・高杯)を中心とする遺物が出土したが、上記の層相から堆積年代は遺物の相対年代よりもやや新しく、飛鳥~奈良時代と考えられる。

### 3.1.5 遺物・遺構帶VI(単層23~36)

本帶はおもに砂礫層・泥のマトリクスをともなう砂礫層、および砂まじり泥層からなる。しばしば異地性(埋積谷周辺のものも含まれる)の植物遺体(樹木の葉・小枝など)を多く含む堆積層が挟まる。埋積谷内の本帶の垂直範囲は、約1.8mあり、この間でおおむね上方細粒化サクセッションをなす。下部の中粒砂~シルトを主とし、植物遺体や炭片のまじる堆積層は、神並遺跡第4次・西ノ辻遺跡第10次調査で5世紀末~6世紀初頭の水利遺構が検出された層準に対比され、本調査においても遺構は検出されなかったものの、同時期の須恵器・土師器が出土した(図29)。また、下位層準の弥生時代中期の遺物も混入する。正確な記録を怠ったが、これらの遺物の多くは本帶上部の堆積層より出土した。図8の土層断面図に示したように、遺構・遺物帶VIIIに相当し、弥生時代中期の土器片を含むより古い堆積層が、埋積谷北側谷壁にはりついたように分布する。この様子から、この堆積層と同時異相をなす埋積谷中央部の堆積層が谷を充填していたが、これらが谷中でいったん開析され、本帶を構成する堆積層によって再び充填されたと考えられる。この開析は、

下位の遺構・遺物帯VIIが弥生時代後期にあたることからみて、弥生時代中期末～後期初頭の比較的短期間に起こったと考えられる。本帯以上の層準で弥生土器が試入するのは、新たな開析部分の埋積が進むなかで、このとき侵食されなかった谷壁の弥生時代中期の堆積層から洗いだされたためと考えられる。なお、この埋積谷の弥生時代中期までの埋積と、その後の開析、および再度の埋積は、河内平野中央部に当時存在した水域、いわゆる「河内湖」の湖水準変動と強く関連すると思われる。

### 3.1.6 遺構・遺物帯VII (単層 37)

本帯はおもに、谷の伸張方向に集積されたカシ属を主とする伐採木とこれらの間隙を充填する砂まじりシルト質粘土からなる堆積層で構成される(図18)。ただし、本帯上部では上位の單層36が伐採木の間隙を充填していた。伐採木は周辺の林地から切り出され、加工までの一時期の貯木を意味したものと考えられる。材木の直径は、15～30cmで、樹皮は残されていたが、枝は払い落とされていた。材木は調査地を横断していたため、その長さは明らかではないが、ほとんどのものは少なくとも3mを越すと推測される。なお、道路を挟んだ西側の西ノ辻遺跡第10次調査区でも、この貯木層の延長部が谷底に沿って約3m検出されている。いっぽう、東に隣接する神並遺跡第4次調査区では、検出されていない。これらのことから、今回の調査区以西の検出部分を合わせると、延長10mあまりの間に貯木層が延びていることになる。

本帯からは、表1・図19に示すように、古墳時代後期・弥生時代後期・弥生時代中期の上器が出土した。弥生時代中期の土器に関しては、遺構・遺物帯VIの項で述べたように、谷壁の堆積層から混入したと考えられ、弥生土器とその他の土器の出現頻度の差に表れている。いっぽう、古墳時代5世紀末から6世紀初頭の土器は、貯木層以上の層準で出土したが、材木の間隙を埋める堆積物からも採集された。このような中で、西に隣接する道路下で行われた西ノ辻遺跡第32次調査では、古墳時代の堆積層と弥生時代中期の堆積層が明瞭に分層され、貯木層がこの間の層準で、わずかに弥生時代後期の土器をともない、その時期のものと判明した(中西、1996)。この結果に調和的な出土遺物は、出現頻度の低い弥生時代後期の上器片である(図30-79・80)。このようなことから、すでに述べた谷中のエビソディックな下刻の後、弥生時代後期に比較的静穏な環境下で貯木層が形成され、その後古墳時代中期末～古墳時代後期堆積層が貯木層の砂礫や泥をかなり侵食して堆積したと考えられる。

### 3.1.7 遺物・遺物帯VIII (単層 38・39)

本帯を構成する堆積層の中心は、上述の貯木層直下の堆積層の下位にみとめられ、当時の谷底に堆積したと考えられる泥質砂ないしは砂質泥であるが、調査深度が増すにつれ調査範囲がかなり狭まったうえ、本体工事の掘削深をすでに越えていたため、上記の貯木層の一部を取り除いて下位層を確認したにとどまる。その堆積層(単層38)と同時異相をなすと考えられる谷壁の堆積層(単層39)は、土層断面図8のT.P.約14m以下にみられる。

図17 遺構・遺物帯V最上部(飛鳥-奈良時代)での埋積谷の検出状況。撮影方向は北。

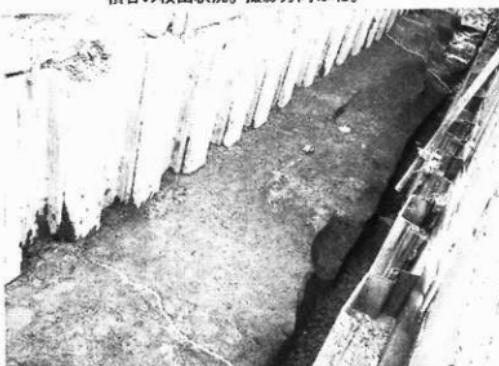


図18 遺構・遺物帯VII(弥生時代後期)の貯木層。写真上部が西(下流側)。



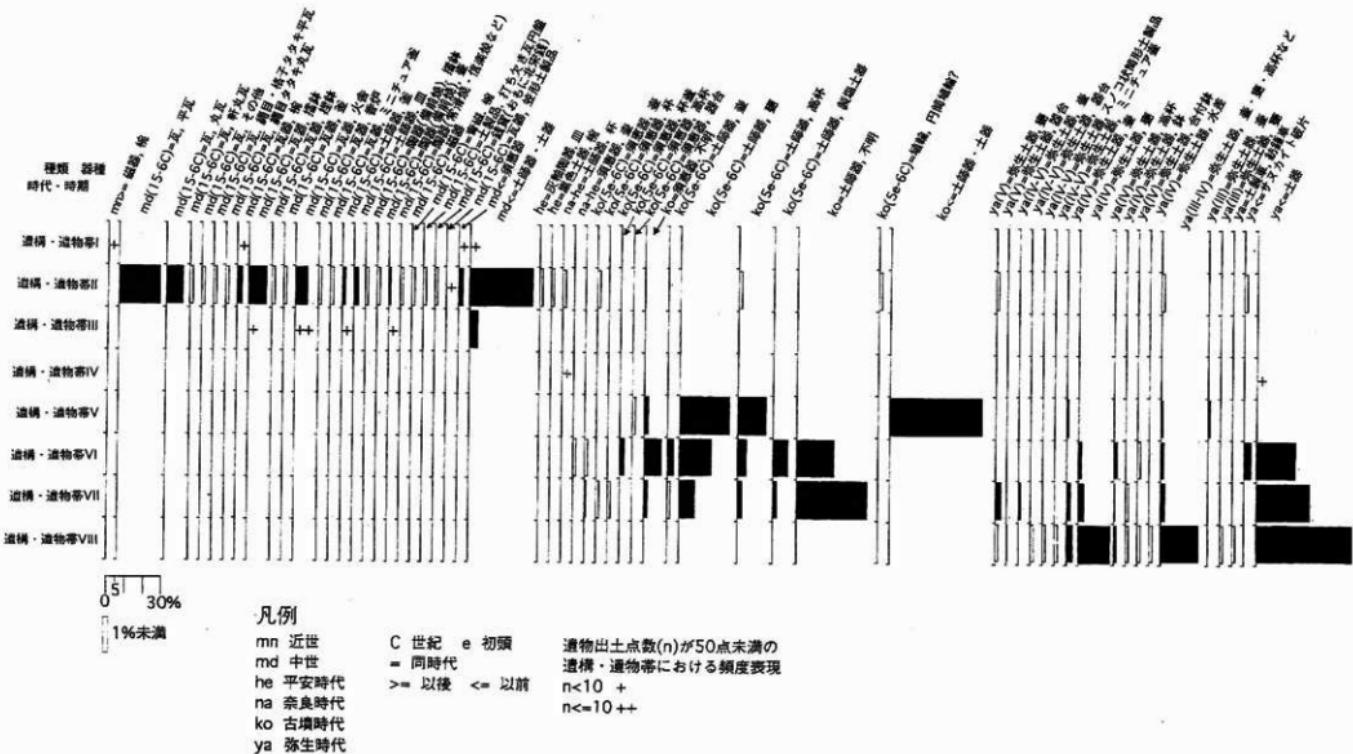


図19 人工遺物の遺構・遺物帶別相対的出現頻度

砂礫まじり粘土質シルトからなり、その大部分は埋積谷壁を構成する堆積物の偽礫と、上壊化した同じ堆積物のマトリクスからなる谷壁斜面の崩落性堆積物であった。これを覆い、その後流水によって再堆積し、葉理がみとめられる部分とは区分される。このような崩落性堆積物の層が形成される空間が存在したこと、この斜面堆積物が本帯を構成する谷底の堆積層の上に載っていることから、少なくともこの埋積谷の最後の剖面は、弥生時代中期末の堆積層形成直後の弥生時代後期初頭に急速に進み、その後埋積に転じるが、弥生時代後期には、その直上の泥質堆積物が堆積するような、静的な堆積環境がある期間持続したと考えられる。

本帯から出土した遺物のほとんどは、弥生時代中期末の畿内第IV様式の土器だが、弥生時代後期、第V様式に属すると考えられるミニチュア長頸壺も含まれている(図31)。これらは、発掘調査における採集エラーというよりも、土器型式の変遷における、あり得べき組成の「微分的」様相を示しているものと解釈する。

### 3.2 人工遺物

今回の調査で出土した人工遺物は若干の近世・近代の磁器破片、室町時代(15~16世紀)の瓦器・土師器・陶器・錢貨と瓦、平安時代の黒色土器、飛鳥時代~平安時代の土師器・古墳時代中期末~後期(5世紀末~6世紀)の須恵器・土師器・埴輪破片など、若干のサヌカイト破片、弥生時代後期の畿内第V様式の土器類、弥生時代中期末の畿内第IV様式の土器類、などである。これらが含まれる遺構・遺物帶ごとの出土量(破片数)を表1に、相対的出現頻度を図19に示した。

これらの内、とくに遺構・遺物帶の相対年代を示すような資料を選び、図20~35に示す。これらの遺物の個別の特徴は図中に記載した。人工遺物について、とくに考慮した諸点を3.2.1(p.21)以下に述べる。

$y_3(V) =$	$y_3(E-V) =$	$y_3(H) =$	$y_{3e}$	$y_{3c}$	$y_{3o}$
出生土器	出生土器	出生土器	土器類	土器類	土器
スノロウ 2-2	■ ■	■ ■	土器・ 高杯など	土器 高杯など	土器 土器
川原土偶頭 チュア型	高 杯 高 杯 高 杯	高 杯 高 杯 高 杯	高 杯 高 杯 高 杯	高 杯 高 杯 高 杯	高 杯 高 杯 高 杯
			10	3	
					4
	1 6		1 1		
	2 4	1	2		27
	5 6	2 1	5		50
1	1	7 33 5 1 1 1	40	3 1	104

表1 人工遺物の遺構：遺物墓別出土点数。時代・時期の凡例は図19を参照。

図20 遺構・遺物帶Iの遺物、土師器・須恵器・磁器

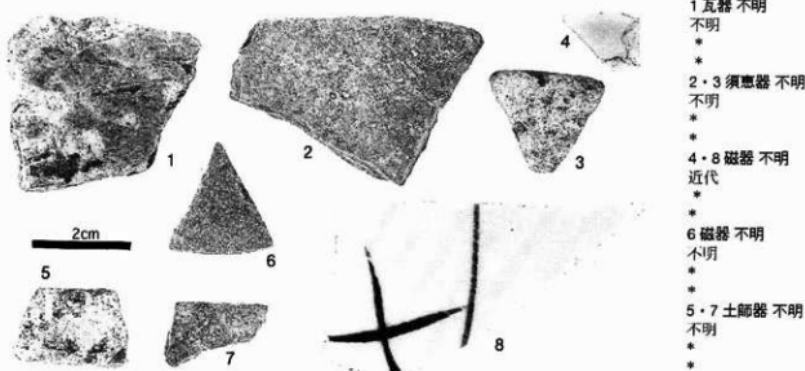


図21 遺構・遺物帶IIの遺物（1）、土師器・陶器

遺物実測図の凡例はP.15に示す。

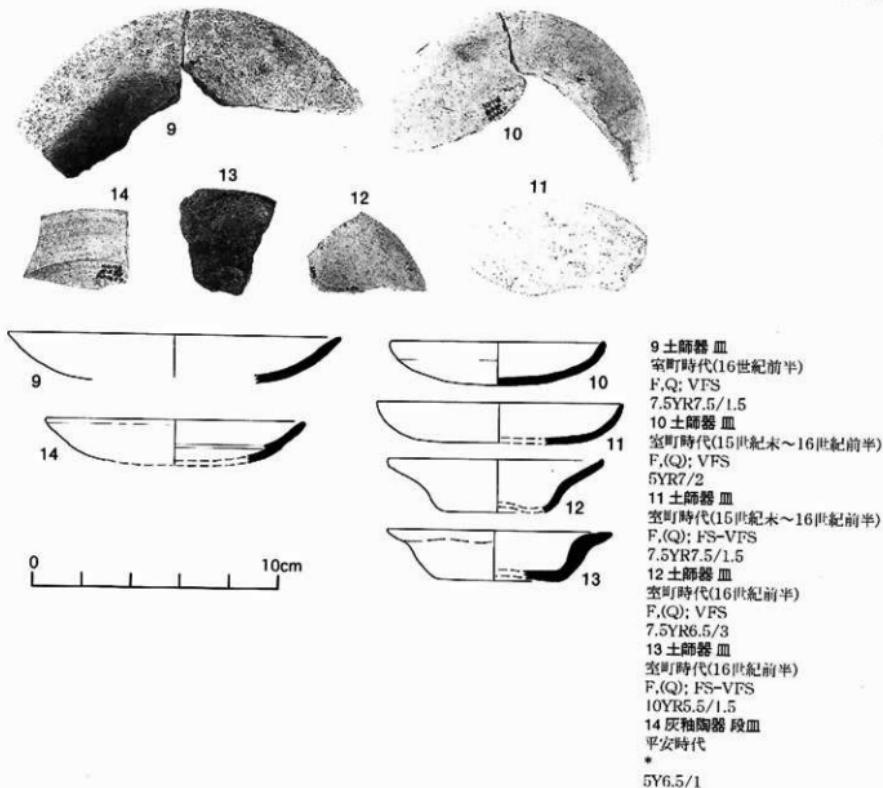
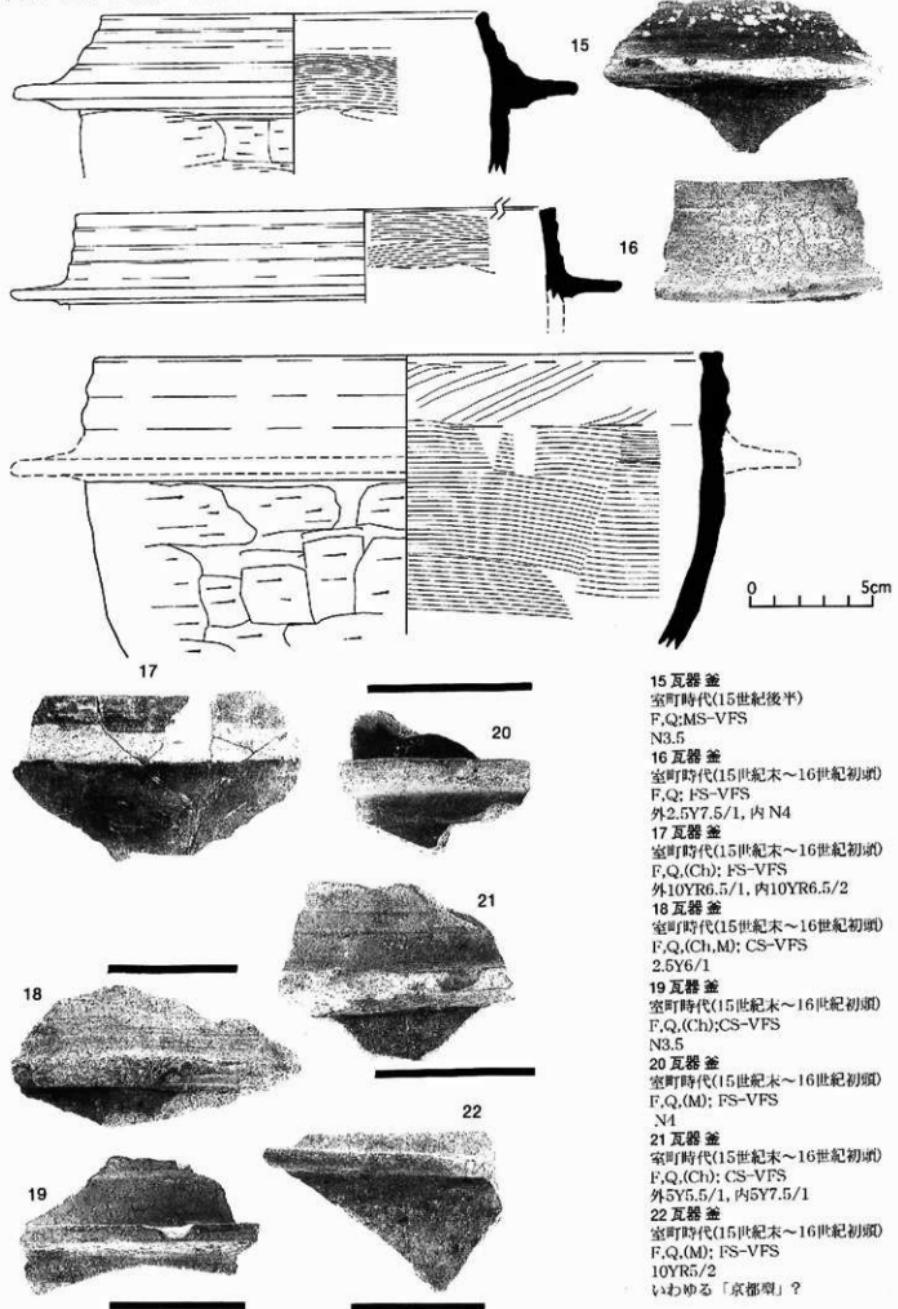


図22 遺構・遺物帶IIの遺物(2)、土師器・瓦器



厚さのスケールバーはすべて5cm。

図23 遺構・遺物帶IIの遺物（3）、瓦器

写真のスケールバーはすべて5cm。

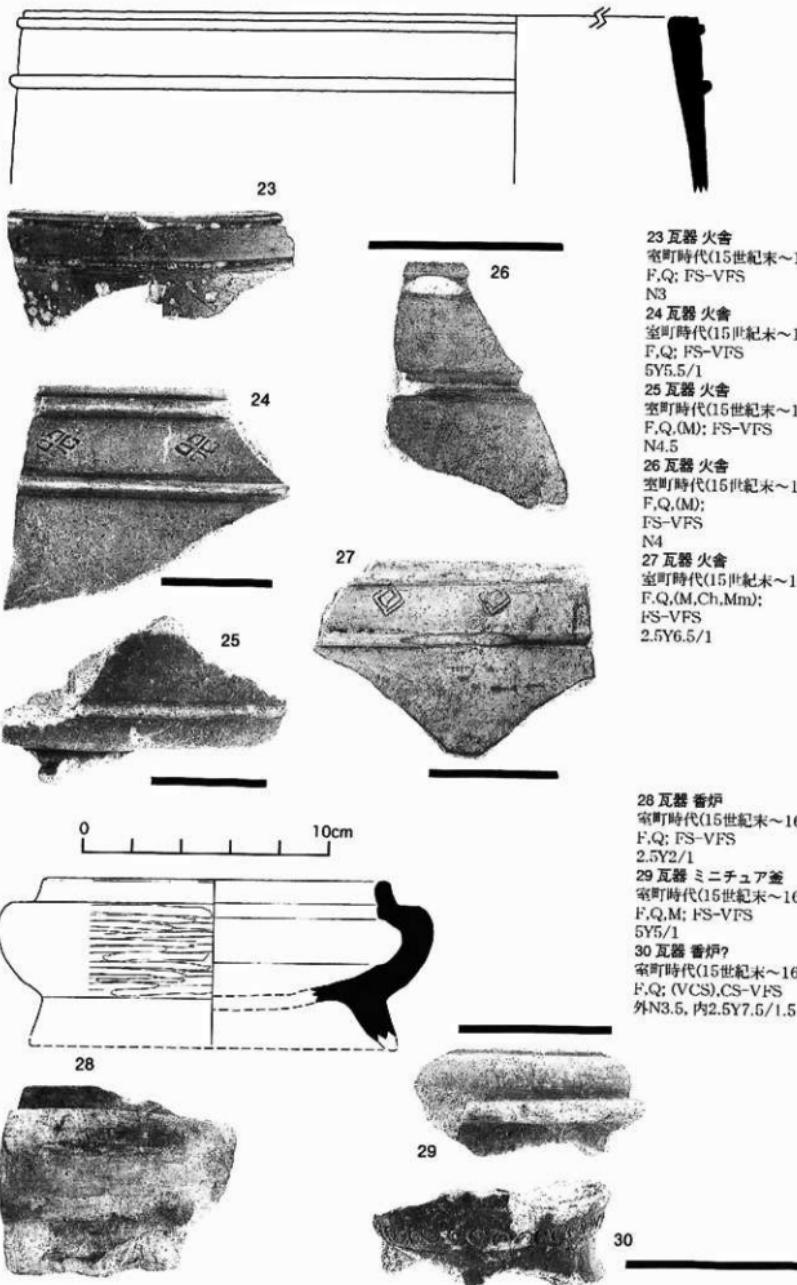
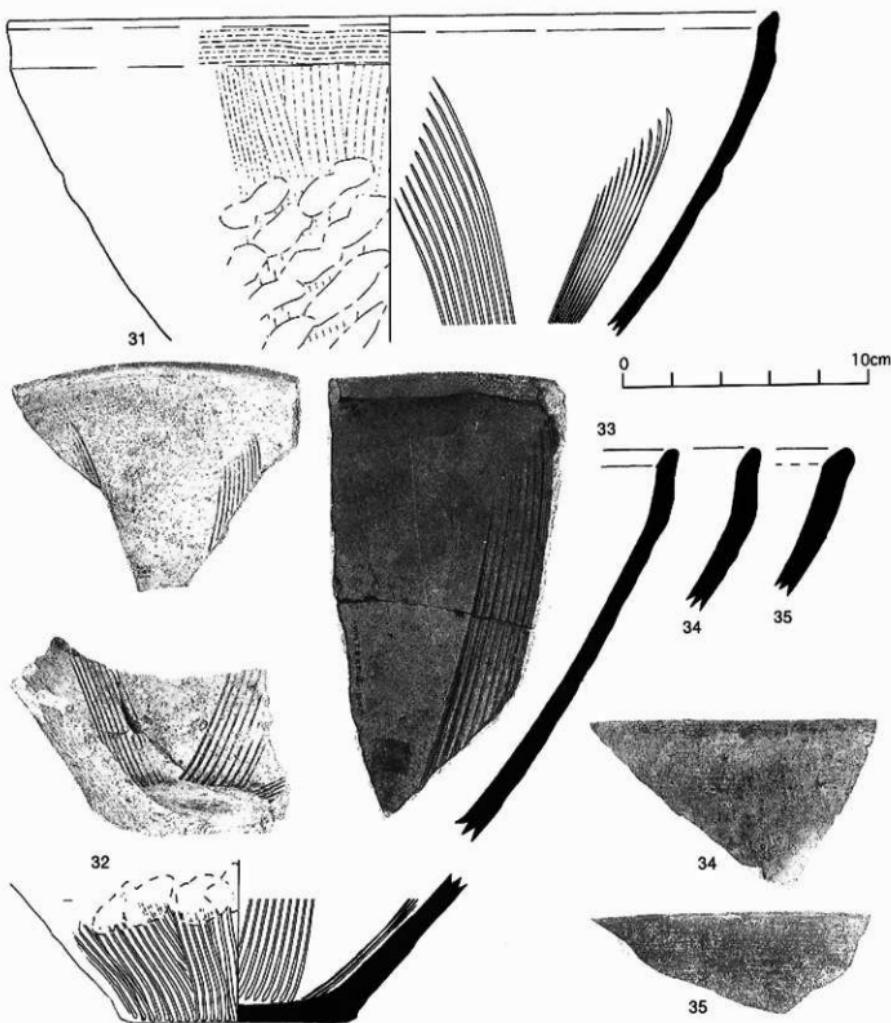


図24 遺構・遺物帶IIの遺物（4）、瓦器

**31 瓦器 撥鉢**

室町時代(15世紀末～16世紀前半)  
F.Q: FS-VFS  
外N4, 内5Y7.5/1 内外面に敲打痕

**32 瓦器 撥鉢**

室町時代(15世紀末～16世紀前半)  
F.Q.(M): MS-VFS  
外N5, 内5Y6.5/1

**33 瓦器 撥鉢**

室町時代(15世紀末～16世紀前半)  
F.Q.(M): MS-VFS  
外5Y6.5/1, 内N4.5

**34 瓦器 撥鉢**

室町時代(15世紀末～16世紀前半)  
F.Q.(M): MS-VFS  
N4

**35 瓦器 撥鉢**

室町時代(15世紀末～16世紀前半)  
F.Q.(M): FS-VFS  
外N3, 内5Y9/1

図25 遺構・遺物帶IIの遺物（5）、磁器・陶器

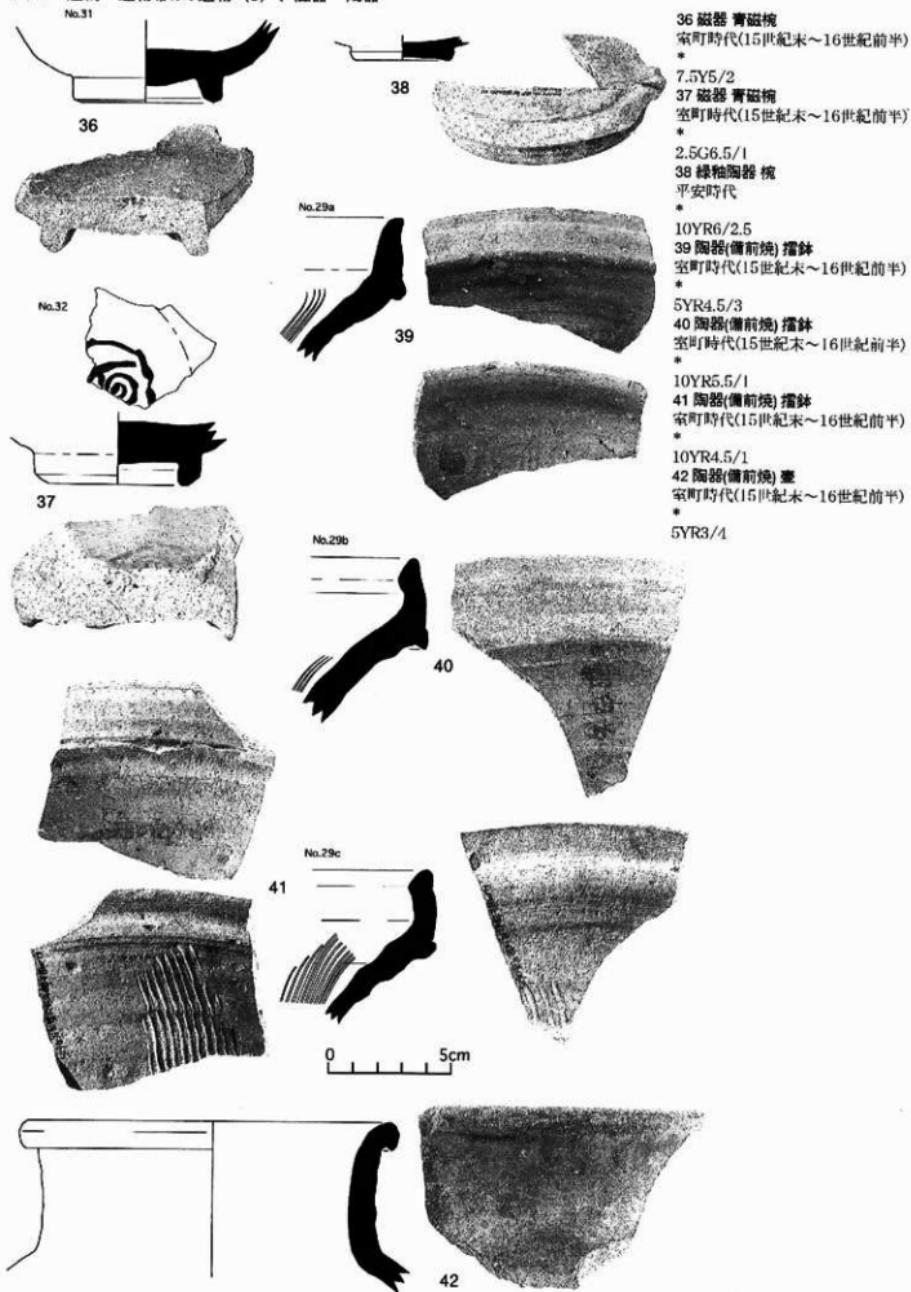


図26 遺構・遺物帶IIの遺物(6)、陶器

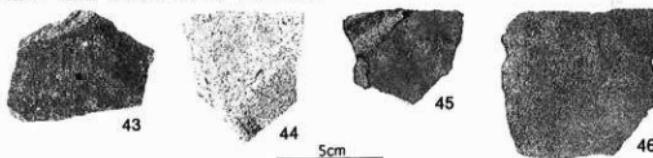


図27 遺構・遺物帶IIの遺物(7)、錢貨



47 錢寶「治平通宝」

宋, 1064年初鋤

\*

\*

48・50 錢寶「政和通宝」

宋, 1111年初鋤

\*

\*

49 錢寶「開元通宝」

室町時代?模鉄銭

背文なし

\*

51 錢寶「祥符元宝」

宋, 1008年初鋤

\*

\*

52 錢寶「洪武通宝」

明, 1368年初鋤, 模鉄銭?

背文あり

\*

53 錢寶「元符通宝」

宋, 1098年初鋤

\*

\*

54 錢寶「不明」

43 陶器(信楽焼) 畫?  
室町時代(15世紀末～16世紀前半)  
F,Q,(M); (Gr)VCS-CS  
5YR5/1

44 陶器(信楽焼) 捏鉢  
室町時代(15世紀末～16世紀前半)  
F,Q,(M); (Gr)VCS-MS  
5YR6/2.5

45・46 陶器(常滑焼) 不明  
室町時代(15世紀末～16世紀前半)  
F,Q; MS-VFS  
5YR4/2

## 土器実測図の凡例

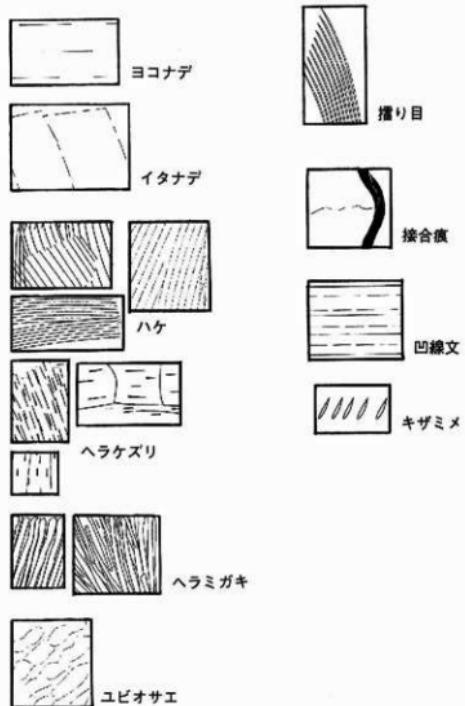


図28 遺構・遺物帯IVの遺物、飛鳥-奈良時代の須恵器・土師器

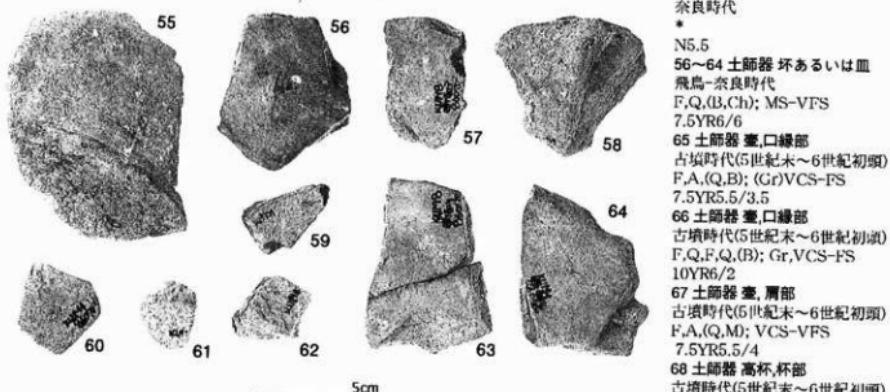


図29 遺構・遺物帯VIの遺物、古墳時代の土師器・須恵器

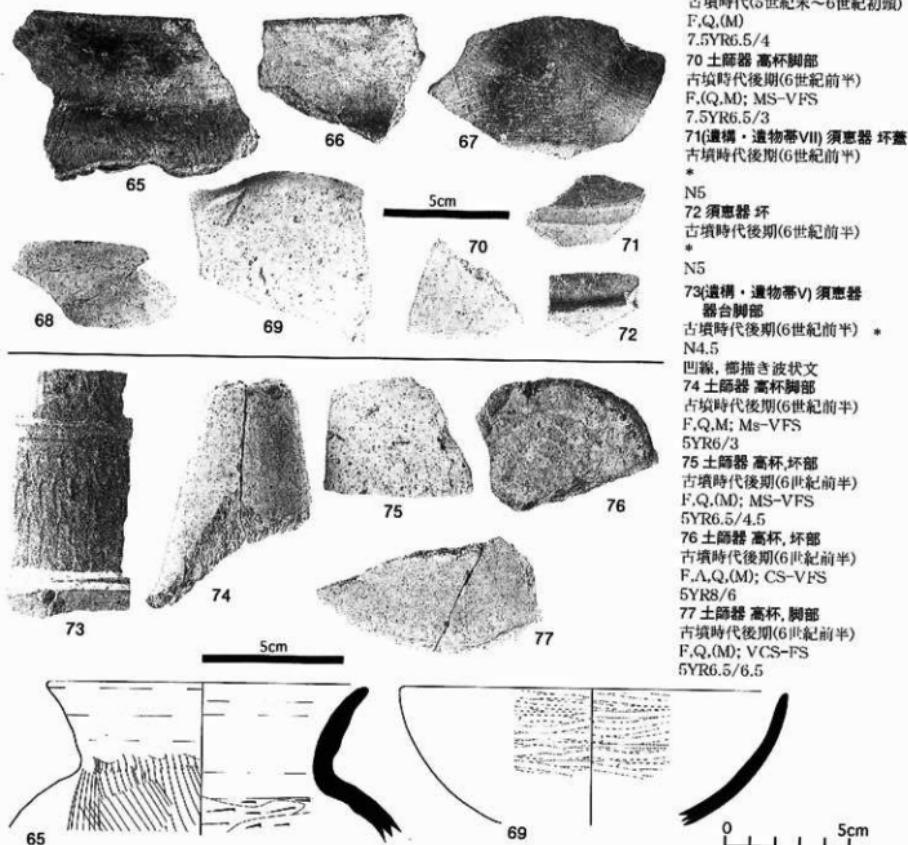


図30 遺構・遺物帶VIIの遺物、弥生土器

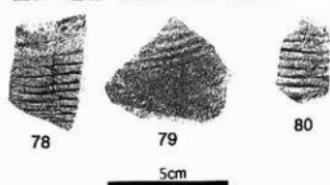


図31 遺構・遺物帶VIIIの遺物（1）、弥生土器

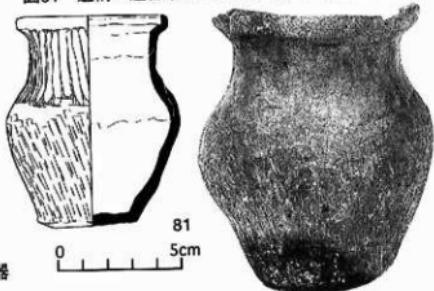


図32 遺構・遺物帶VIIIの遺物（2）、弥生土器

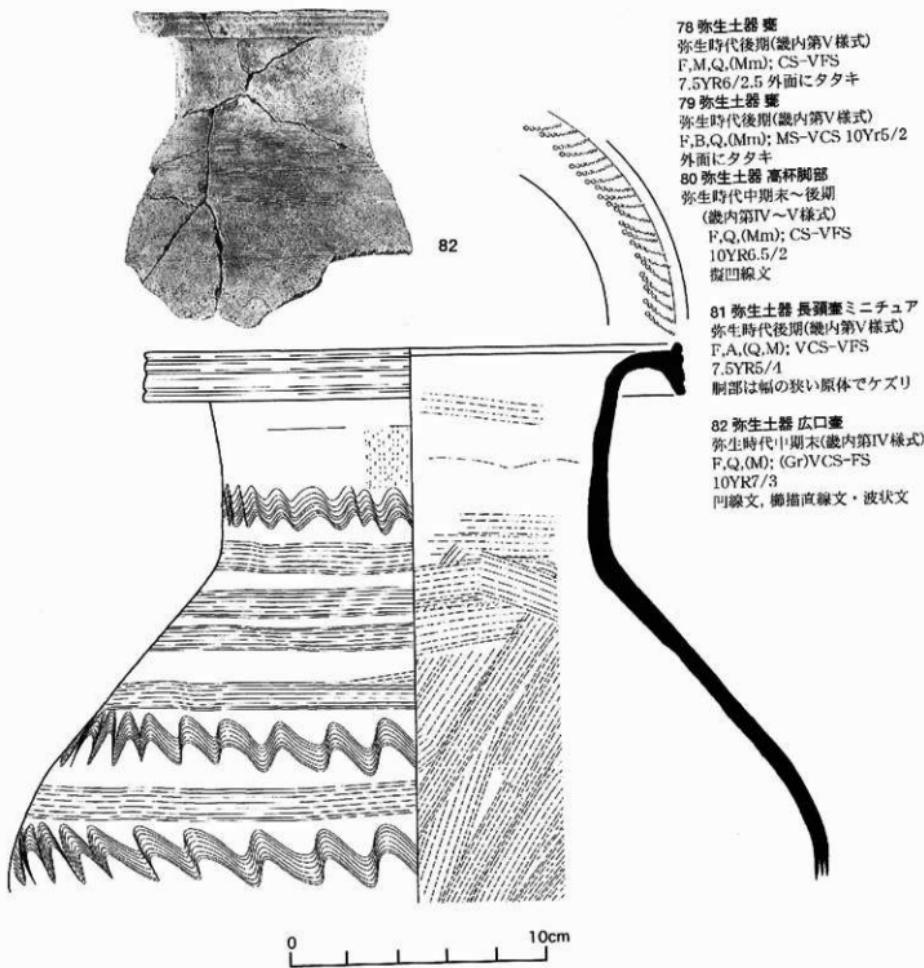


図33 遺構・遺物帶VIIIの遺物（3）、弥生土器



図34 遺構・遺物帶VIIIの遺物(4)、弥生土器

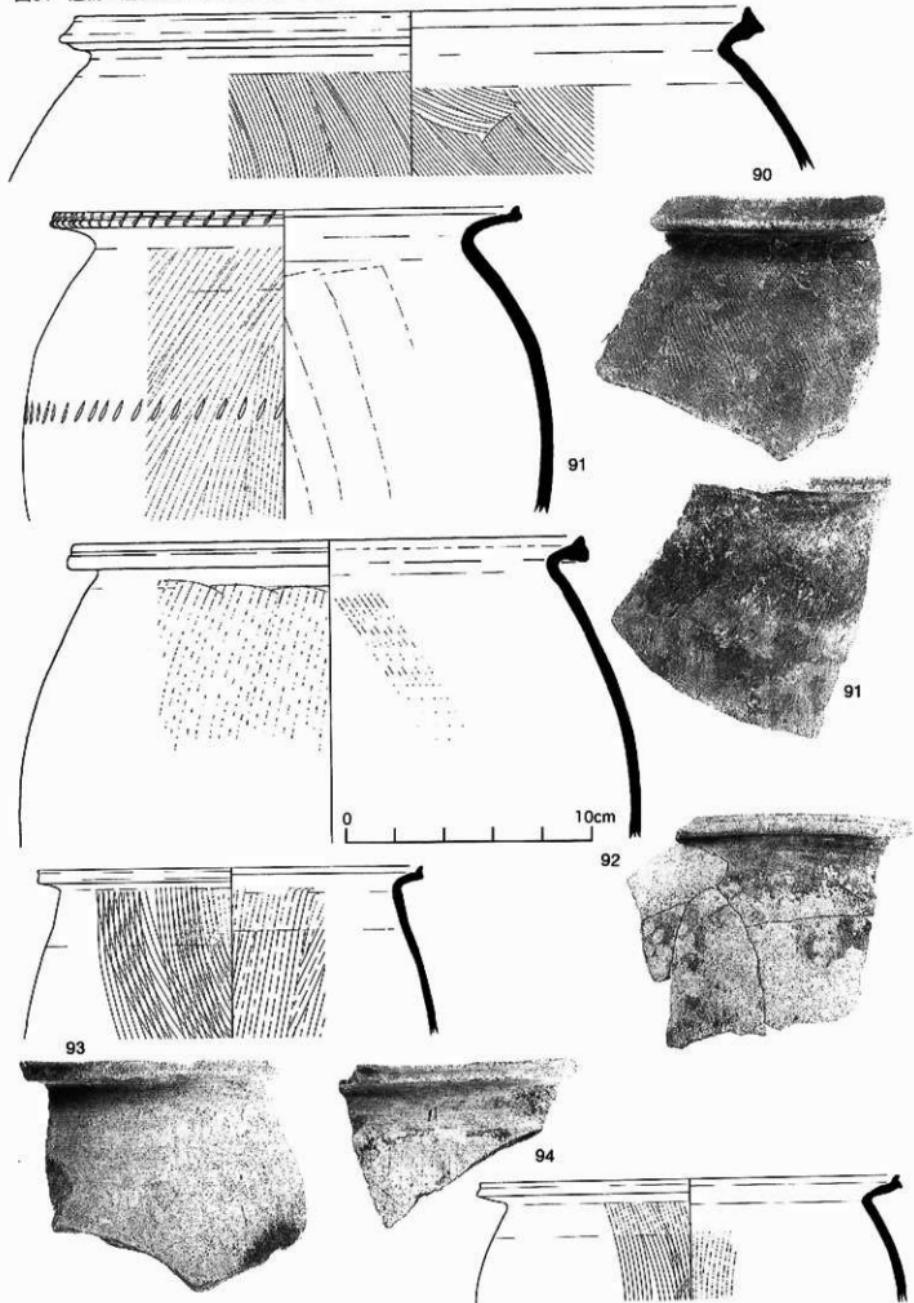
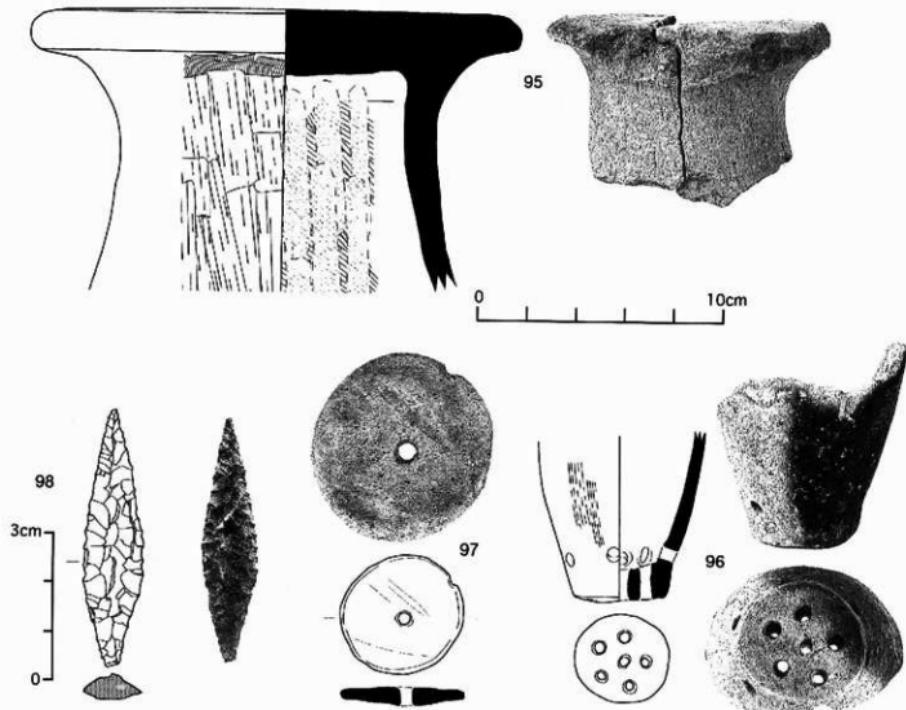


図35 遺構・遺物帶VIIIの遺物(5)、弥生土器・石器



## 90 弥生土器 瓢

弥生時代中期末(畿内第IV様式)

F,A,(Q,M); VCS-VFS  
2.5Y4/1

## 91 弥生土器 瓢

弥生時代中期末(畿内第IV様式)

A,F,(Q,M); CS-FS  
7.5YR5.5/4

外面全体に煤付着、凹線文、キザミ目文

## 92 弥生土器 瓢

弥生時代中期末(畿内第IV様式)

F,A,(Q,M); CS-FS  
10YR6.5/2

外面に煤付着、凹線文

## 93 弥生土器 瓢

弥生時代中期末(畿内第IV様式)

F,A,M,(Q); CS-VFS  
7.5YR5.5/3

## 94 弥生土器 瓢

弥生時代中期末(畿内第IV様式)

F,Q,M,(Mn); VFS-MS  
7.5YR7/2

## 95 弥生土器 台状土器

弥生時代中期後半(畿内第III-IV様式)

F,M,(Q,A); (Gr,VCS)-VFS  
10YR5.5/2.5

## 96 弥生土器 スノコ状簡形土製品

弥生時代中期末～後期初頭(畿内第IV-V様式)

F,A,(Q,M); VCS-FS  
5YR5.5/4

スノコ部分内面に有機物残滓付着

## 97 土製品 紡錘車

弥生時代

F,A,(Q,M); CS-VFS  
5YR5.5/4

## 98 石器 石鏃

弥生時代

\*

\*

サヌカイト製、両面調整

### 3.2.1 遺構・遺物帶IIの瓦の観察結果

遺構・遺物帶IIの水路跡より平瓦319点、丸瓦135点、軒丸瓦3点(図36)、軒半瓦破片1点、鬼瓦破片2点(図37)が出土した。軒丸瓦は、巴文軒丸瓦で、製作された年代は89・90は室町時代、88はやや古く室町時代前半～鎌倉時代と考えられる。遺構・遺物帶IIで瓦の伴って出土した土器類は、先の室町時代の巴文軒丸瓦よりもやや新しい製作年代が推定される。このようなことから、土器類を使用した集落の形成以前に、調査地周辺に瓦葺きの堂宇が存在したと想像される。遺物は集落およびこの堂宇の廃棄直後の堆積状況を示していないので、両者の廃棄の前後関係および時期差は不明である。現在知られる調査地周辺の中世までの寺院跡のうち、もっとも近い地点で確かめられているのは、法通寺跡のものであるが、同寺の存続は今回もっとも多く出土した瓦の時期までは確かめられていない。その可能性とともに、他の寺院跡の有無も今後の課題となる。

軒瓦以外の平瓦・丸瓦について凹面・凸面の成形・調整技法を観察し、出土資料にみられる技法のモードを調べた。その結果を表2に示す。表2-bは平瓦凹面に粗い布目、凸面に繩目タタキや格子目タタキを残し、平安時代以前のものと考えられる(図38-108～110)。その他の平瓦は表2-aにまとめた。これらは表面の炭素の吸着の均一な灰色～暗灰色を呈し、成形・調整技法の特徴からも、先の資料より新しく、主として室町時代のものと考えられる(図38-104～107)。

瓦の成形時には凹面に布目が、凸面にやや細かい繩目タタキが着く。また、離型のための中へ粗粒砂、いわゆる「離れ砂」が瓦の表面に散見される。その後調整時には、これらがケズリ・ハケ日・板ナデ・ナデで一部ないし全体に消去される。観察に際して注目した点は、これらの成形・調整あるいは離型材料の痕跡がどのように残されているかということであった。

ケズリは、ヘラ状の工具で行われたと考えられるが、瓦の側縁や端縁の切削・成形に用いられたと考えられる刀子状の硬質で、鋭利な工具とは異なる。また、後出の板ナデとの識別が困難であった。ハケ調整のほとんどは、歯の間隔が不規則な薄板の木口をこすりつけたものと考えられる。歯の痕跡がほとんどなく、粗面のこすり痕をなすものを板ナデとした。ナデは指頭を直接用いず、布・革などのナデ工具を用い平滑に仕上げたと考えられる。

実際の資料では、凹面をナデ、凸面をケズリで仕上げたものがほとんどであった(図38-105・106)。これらのなかには、両面ないしは凸面に離れ砂を残す一群があり、同じ表面調整の手法を用いながらも、実際の仕上げには顕著な差がある。表面の炭素の吸着にも差があり、表面に砂粒を残さない一群は、暗灰色で鈍い光沢さえとめられたり、均一な灰色を呈するのに対して、砂の付着のみられる一群は淡灰色でまだらな二次焼成むらがみとめられた。この差が仕上げの精粗だけを意味するのか、瓦の利用目的や製作地・製作集団あるいは製作時期の差であるのかは不明である。

丸瓦の出土点数は平瓦にくらべてかなり少なく、集計結果にみられるモードの有意性は弱いが、凸面では繩目タタキを、ハケとナデないしは、ハケのみで仕上げる手法がみられ

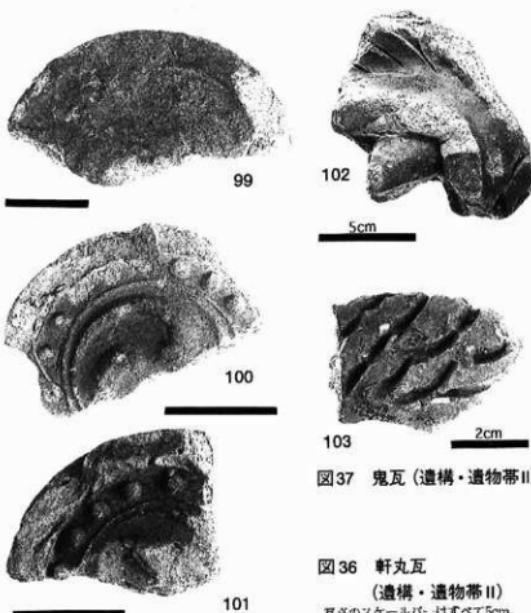


図36 軒丸瓦  
(遺構・遺物帶II)

写真的スケールバーはすべて5cm。

99	F,(Q,M);VCS-VFS
N3.5	
煤付着	
100	F,Mm,(Q,M); MS-VFS
N5.5	
101	F,(M)
N5	
102	F,Mm,Q; CS-VFS
103	F,Mm,Q; CS-VFS
N4	

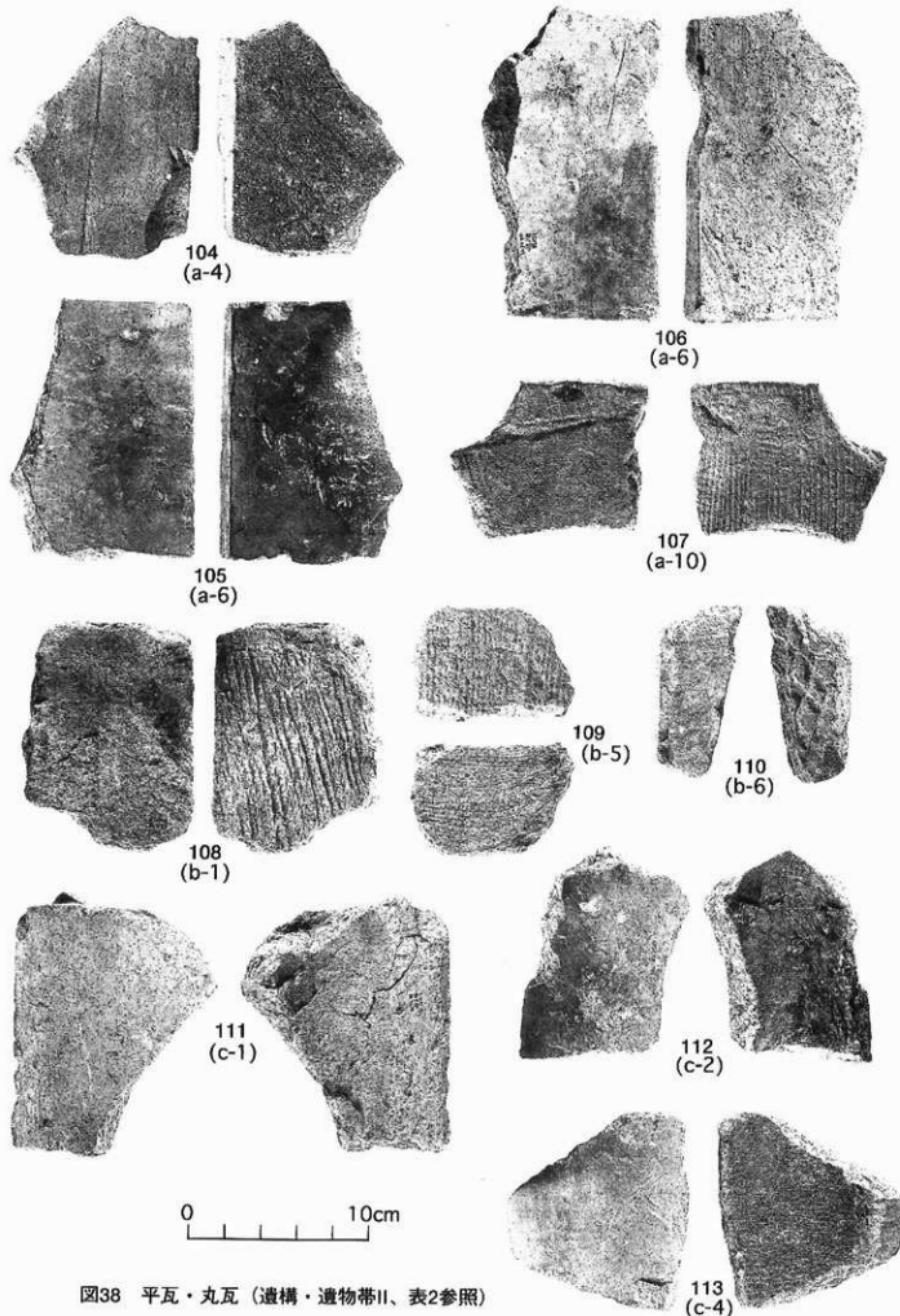


図38 平瓦・丸瓦（遺構・遺物帶II、表2参照）

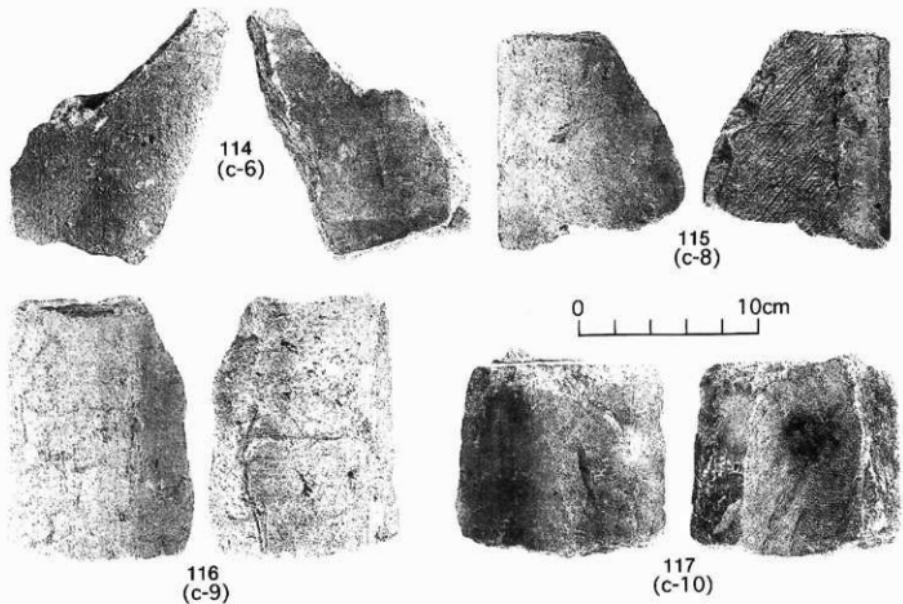


図39 丸瓦（遺構・遺物帶II、表2参照）

た。凹面は布目で仕上げたものは少なく、ハケないし／およびナデでまばらに消去する手法が多数みられた。しかし、もっとも卓越する手法は、凸面をひじょうに平滑なナデで仕上げるいっぽう、凹面は、細かい布目で仕上げるもので、41点あった（図39-117）。これらは、使用時に上面をなす凸面の入念な調整や色調から、先に述べた黒く仕上げのよい平具（図38-105）と対で製作されたと考えられる。

表2-dは、凸面にナデ・ハケを施すが、比較的明瞭に網目タタキを、凹面には粗い布目を残すもので、表2-bと同様、平安時代以前のものと思われる。

### 3.2.2 遺構・遺物帶IIの土器類の組成

遺構・遺物帶IIから出土した遺物の組成をみると、通常の食器容器が卓越する組成とは異なる印象を受ける。図19のダイアグラムは表1に示す破片数から算出した相対出現頻度を示すため、「中世以前」で器種不明の土器師がきわだっているが、仮に出現頻度を重量から算出すれば、むしろ瓦器の鉢鉢・火舎の出現頻度がはるかに卓越するはずである。すでに述べたようにこれらの遺物は同時期の周辺の遺構が発達ないし破壊された後に投棄されたものである。水路底を安定させるための材料として、大礫および瓦と、これらに匹敵する粒径の瓦器片が選択的に混入されているのではないかと思われる。より細粒の遺物が流水によって失われた可能性は本帶の砂層性堆積物の粒度や堆積構造からみて低い。

### 3.2.3 遺構・遺物帶IIIの台座状瓦器について

遺構・遺物帶IIIの上墻群は上部を削平され、浅く残存するのみであったが、上墻1と3からは、若干の人工遺物が出土した。この中で「台座状瓦器」と呼んだものについて述べる（図40）。

本資料は破片であるが、復原すると、直径48cm、厚さ5cmの円盤状で、片面縁辺に緩

表2 平瓦・丸瓦の表面調整別破片数

	表面の技術的特徴	型抜きの砂付層			木口
		両面	片面	CC CV	
a 平瓦	1 CC (ケズリ)→ナデ CV ケズリ→ナデ	7	0	1	0
	2 CC ?→ハケ→ナデ CV	9	1	1	0
	3 CC ?→ナデ CV (純目タキ)→ケズリ→ナデ	4	0	0	0
	4 CC 布目[継]→ナデ CV (ケズリ)→ナデ	6	0	0	1
	5 CC 布目[継]→ナデ CV	3	1	0	1
	6 CC ケズリ(ハケ)→ナデ CV ?→(ハケ)→ケズリ	154	38	2	36
	7 CC ケズリ→ナデ CV ?→ケズリ	1	1	0	0
	8 CC ?→板ナデ(ケズリに似る) CV ?→ナデ	0	1	0	0
	9 CC ?→ナデ CV	0	6	0	0
	10 CC 布目→ハケ CV ?→ハケ	1	0	0	0
b	1 CC 布目[中]→ハケ→ナデ CV 純目タキ	1			
	2 CC ?→板ナデ CV 純目タキ	1			
	3 CC 布目[中] CV (純目タキ)→ナデ	1			
	4 CC 布目[中] CV 純目タキ	1			
	5 CC 布目[継] CV 純目タキ	4			
	6 CC 布目[継] CV 純目タキ	2			
	7 CC 布目[中] CV 布目[中]	1			
	不明	31			
c 丸瓦	1 CV 純目タキ→ナデ CC 布目→ハケ→ナデ	4			
	2 CV ?→ナデ CC	4			
	3 CV 布目[継]→ハケ→ナデ CC 純目タキ→ナデ	2			
	4 CV (純目タキ)→ナデ CC 布目[継]→ナデ	9			
	5 CV ?→ナデ CC 布目[継]→ナデ	3			
	6 CV 純目タキ→ハケ→ナデ CC 布目[継]→ナデ	1			
	7 CV ?→(ハケ)→ナデ CC 布目[継]→ナデ(不完全)	12			
	8 CV ?→ナデ CC 布目[継]→ハケ	20			
	9 CV 純目タキ→(ハケ)→ナデ CC 布目[継]	11			
	10 CV ナデ(ミガキに似る) CC 布目[中]~中	41			
	11 CV 布目タキ→ナデ CC 布目[継]	2			
	12 CV 純目タキ→ナデ CC 布目[継]	3			
	不明	3			

やかなS字状の傾斜面をもたせ、端縁に高さ2cmあまりの面を取った形状をなし、頂部に円形の広い平坦面をもつ。全体に笠形を呈する。とりあえず、この笠形の凸面を上面と考える。

厚さ1.5cmあまりの3層の粘土板を3層積み重ねて成形されている。下面をなす板にやや小さい直径の芯になる粘土板が重なり、上面の粘土板は両者を覆うように笠形に重なっている。芯になる粘土板は2・3回に分けて成形されたようである。上面の平坦面部分の粘土板の断面では、水平方向の粘土の流理あるいはファブリックがみとめられ、この部分がタタキの手法で成形されたと考えられる。ただし、ごくわずかな領域に布目が残ることから、難型に充填する方法で成形された可能性もある。この場合は、上面の粘土板から型内に充填されることになる。また、上面の平坦面下にもタタキによるものと同様な流理が形成されると考えられる。成形後、上面と端縁の面を、3.5~4cm幅で、6ないし7本の歯をもつ櫛状の道具を、軽く押しつけたり、短いストロークで擦ったりして表面を調整している。下面は、歯のない板の木口を用いたと思われる板ナデで仕上げている。

本資料の名称・用途は良好な出土状況の類例がほとんどないため、今のところ不明だが、1995年に実施された若江遺跡第61次発掘調査で、同じ成形手法の土製品の破片が出土した。この資料も、上面に平面形の輪郭より小さい平坦面をもち、縁辺にむかって緩やかに傾斜する面と端部の面取りがみとめられる。ただし、上下の平坦面はハケ目で仕上げている。また、残存するわずかな縁辺は直線で、全体の平面形は矩形を呈するものと考えられる。この資料から、同器種には円形と矩形の2種類があったことがわかる。また、同器種の形状が何かと積み重ねての使用が想定されること、上下面の位置は上述の状態で安定し、両資料ともに下面は、詳細にみれば、全体にゆるやかな凹面をなすが、細かい凹凸が多いことから、この接地面は下面縁辺部から端部であると考えられること、などの理由から何らかの「台座」ではないかと想像される。さらに想像をすすめれば、円形・角形の2種類があり、本資料に相応してこの上に載せられるものとして、火舟が思い浮かぶ。このことの証明は今後の課題としたい。

### 3.2.4 掘乱部から出土した冶金関係遺物

遺構・遺物帯から除外した調査区北部の掘乱部から、冶金に用いられたとみられるふいごの

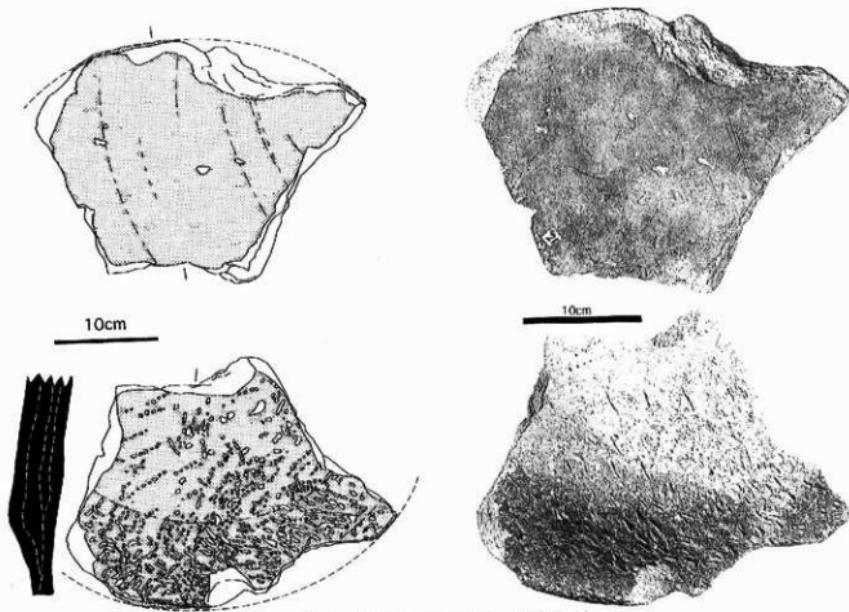


図40 台座状瓦器（遺構・遺物帶III）

羽口、炉焼ないし炉床の一部をなしていたと思われる軒平瓦破片、炭や砂粒がまじった溶融土塊がまとまって出土した(図41・42)。この振乱部の直下には中世の遺物が卓越する遺構・遺物帶IIと奈良時代頃の自然堆積層が分布するため、本資料は遺構・遺物帶IIないしIIIにふくまれていた可能性が高い。また、表面が溶融した軒平瓦の凹面はやや細かい布目を残し、凸面はケズリで仕上げているため、その製作時期は平安時代以降と考えられる。

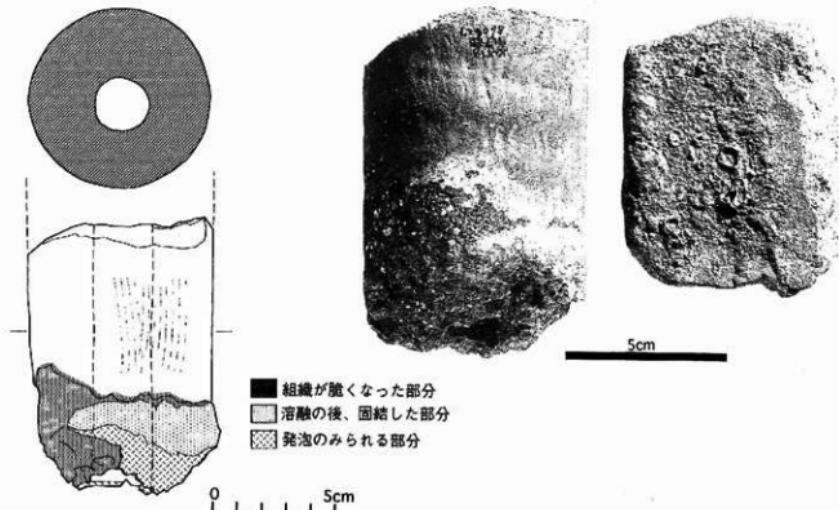
ついごの羽口の胎土には、黒雲母花崗岩の岩体から生産された角ばった粗粒砂・極粗粒砂が多く含まれ、神並遺跡周辺の現世の河川に混入する角閃石を含まないため、搬入品と考えられる。ただし、本遺跡より北方数100m以遠、南方約4km以遠の生駒山地西麓の河川流域では、上流部の黒雲母花崗岩地帯から流出した砂礫が入手できる。そのため、かなり近隣からの搬入したもの可能性もある。

### 3.2.5 遺構・遺物帶VIIIの畿内第IV様式土器の出土状況

今回の調査では、土層断面図に記載した遺構・遺物帶VIIIの、埋積谷北側谷壁斜面の堆積層から弥生時代中期、畿内第IV様式の土器が出土した。いっぽう、南側谷壁斜面にも同じ時期に堆積したと考えられる崩積性堆積物がみとめられたが、遺物はほとんど出土していない。

ところで、神並遺跡西端部および西ノ辻遺跡で検出された埋積谷中から出土した畿内第IV様式の土器を主とする弥生時代中期後半の遺物は、北側に隣接する植附遺跡に存在した集落から廃棄され再堆積したかのように、埋積谷北側谷壁斜面寄りに検出されている。植附遺跡では、1986年の第1次発掘調査地点では、壇棺墓のほかに、同時期の土器溜まりが検出されている。また、1962年頃に旧国道170号線の西側で工場建設に際して弥生時代中期の土器が出土した。以上のことから、弥生時代中期後半の短期間に継続した集落跡が、植附遺跡の南辺付近にあり、その時期には、西ノ辻遺跡の領域よりもむしろ中心的に発達していたのではないかと推測される。

図41 ふいごの羽口、一部溶融した軒平瓦



#### 4.まとめ

神並遺跡第8次発掘調査では、下水道埋設工事に伴う細長いトレンチ内で、北北西-南西方向の水路跡が検出され、多数の礫とともに、室町時代(15~16世紀)の瓦・土器類・陶磁器類・錢貨などが出土した。これらは、水路を構成する堆積層の累重関係から、中世~近世の再堆積物と判断された。

さらに下位の層準には、縄文時代に下刻され、弥生時代中期までに埋積が進み、その後弥生時代中期末~後期初頭の再下刻を経て、飛鳥-奈良時代に埋没した埋積谷が検出され、谷中の堆積層から占墳時代中期~後期・弥生時代中期末~後期の遺物が出土した。また、本調査地の隣接地の調査で、埋積谷内で検出されている古墳時代(5世紀末~6世紀初頭)の水利遺構の層準と、その下位の弥生時代後期の貯木屑の層準を確認した。以上の結果は、本調査区の隣接地ですでに行われた神並遺跡西端部~西ノ辻遺跡の発掘調査において検出された同一埋積谷の層序と対比し、さらに検討することにしたい。この層序論は、縄文時代後・晩期以後、奈良時代までの生駒山西麓の環境変化を推測するうえで重要な意味をもつと思われる。

#### 参考文献

- 財団法人 東大阪市文化財協会 (1984) 「甦る河内の歴史－国道308号線関係遺跡発掘調査中間報告展図録」, p.4-9.
- 下村晴文 (1985) 「法通寺一石切削箭神社穂積殿建設工事に伴う調査」, 財団法人 東大阪市文化財協会, p.14-17.
- 下村晴文・才原金弘・曾我菴子・小西優美 (1986) 「神並遺跡I」, 財団法人 東大阪市文化財協会.
- 菅原章太 (1992) 「神並遺跡XIII－第二阪奈有料道路建設に伴う神並遺跡第13次発掘調査概要報告」, 財団法人 東大阪市文化財協会.
- 中西克宏・木達正宏 (1996) 「神並遺跡XIV－第二阪奈有料道路建設に伴う神並遺跡第

14次発掘調査報告」、財団法人 東大阪市文化財協会、p.38-54、62、65-69,  
pl.56。

中西克宏 (1966) 「西ノ辻遺跡第32次発掘調査報告書—第二版奈有料道路建設に伴う発  
掘調査報告」、財団法人 東大阪市文化財協会。

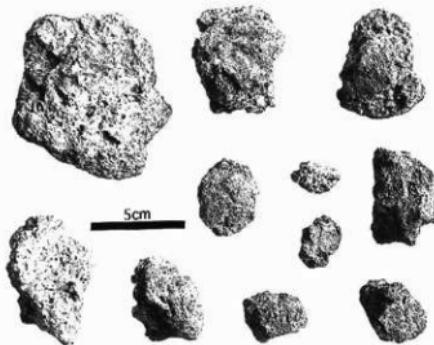


図42 溶融土塊 (Aトレンチ、北部攪乱部)

---

#### 神並遺跡西端部の水路跡と埋積谷

—下水1-10工区管渠製造工事に伴う神並遺跡第8次発掘調査報告—

1997年3月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 大日印刷株式会社

---

# An Excavation Report of Drainage Ditch and Buried Valley at the Western Edge of Kounami Site, Osaka Prefecture

## Contents

1. Introduction	1
2. Progress of the excavation	2
3. Results of investigation	3
3.1 Ethnozones	3
3.2 Artifacts	9
4. Conclusion	26

Kounami site is located in the most eastern part of Kawachi alluvial plain, Osaka prefecture(Fig.1). This site area, ca.500m in diameter in the range of 17-40m altitude, is on the slope of alluvial fan developed from the end of Pleistocene to Holocene beneath the foot of Mt. Ikoma(642m). The eighth archaeological rescue survey of this site was carried out in June, 1986, prior to the destruction of archaeological materials by burying the sewage pipeline.

As a result, a north-south stretching ditch, ca.0.4m in depth and more than 2m in width was found(Fig.10-13). Though the ditch was filled with many reworked gravels and artifacts of Muromachi period(15-16th century), mainly roof tiles(Fig.36-39)and potteries(Fig.21-27), the date of the construction should be newer than the date of the artifacts. Because, at the horizon underneath the ditch bottom, some large pits and well were containing same-aged artifacts and gravels(Fig.14,15), and the upper parts of these facilities were distructed or eroded by the construction of the ditch.

Immediately below the ditch, a buried valley stretching east to north across the excavation area, ca.10m in width and more than 3.5m in depth, was found(Fig.8,17). By the inference from the stratigraphic investigation in surrounding area, the valley incised the alluvial fan surface at two times in Jomon period (in the earlier than the later stage of Late Jomon period(ca.4500y.B.P.) and in the later stage of Final Jomon period(ca.2500y.B.P.)), and filled mainly from Yayoi period(the 3rd century B.C. to the 3rd century A.D.) to Nara period(the 8th century).The beds filling the valley included artifacts of the late stage of Middle Yayoi period to the beginning of Late Yayoi period(ca. 100y.A.D., Fig.30-35), Late Kofun period(ca.500y.A.D., Fig.29), and Asuka-Nara period(ca. 700y.A.D., Fig.28). Because the beds of Late Yayoi period and Late Kofun period overlain erosionaly on the former fill, it can be inferred that the base level was lowered temporarily at the end of Middle Yayoi period and the end of Middle Kofun period. The alternation of the accumulation and erosion in the depositional succession of the buried valley may be explained by the relative sea and lake level changes, and fluctuation of steam load related to the climatic changes after the maximum stage of Jomon transgression in ca.5300y.B.P.

At the horizon 3.5m below the surface of the test pit at the southern end of excavation area, a scatter of charcoal fragments and autochthonous wooden roots of fossil forest, probably developed in the late glacial substage of Würm were found. Species identification and dating of those is not finished.